

GSJ 地質ニュース

地球をよく知り、地球と共生する

2018

3

Vol.7 No.3



国立研究開発法人
産業技術総合研究所
地質調査総合センター



<https://www.gsj.jp/publications/gcn/>

本誌のPDF版はオールカラーで公開しています。



3月号

-
- 口絵 63 **ブラウンスが報告した東京の露頭**
中島 礼・加瀬友喜・川辺文久
-
- 口絵 65 **東京都内の郷土館における更新世貝化石の展示**
川辺文久
-
- 67 **東京都区部産のトウキョウホタテの産出記録および標本保管**
川辺文久・中島 礼・加瀬友喜・田口公則・佐々木猛智・守屋和佳
-
- 80 **J.J. ライン著「中山道旅行記」邦訳（その3）**
—美濃を横切る—
山田直利・矢島道子
-
- 86 **書籍紹介 「三つの石で地球が分かる**
—岩石がひもとくこの星のなりたち—
-

ブラウンスが報告した東京の露頭

中島 礼¹⁾・加瀬友喜²⁾・川辺文久³⁾

ダーフィット・ブラウンスは1879年にドイツから東京大学にお雇い教師として赴任したエドモンド・ナウマンの後任教授である。ブラウンスは赴任後、東京・横浜周辺の地質調査を行い、東京の王子、駿河台、品川における武蔵野台地東部の地層から貝化石の産出を報告した(Brauns, 1881)。王子の貝化石産地は北区滝野川地区の石神井川河岸で、現在は音無さくら緑地の公園内の崖として現在も保存され観察できる。この産地周辺の貝化石層は王子貝層と呼ばれ、かつては“東京層”の模式地とされた。



写真1 ブラウンス夫妻とその弟子たち
ナウマンやブラウンスは多くの地質学者を育て、地質調査所の設立に大きな貢献をした。前列左から2番目がブラウンス、後列左から5番目が地質調査所2代目所長の巨智部忠承、7番目が3代目所長の鈴木 敏。地質調査所百年史編集委員会編(1982)から転載。



写真2 音無さくら緑地
石神井川は戦後に河川改修されるまでは蛇行を繰り返す河川で、強くくびれた部分では溪谷のような地形をつくっていた。音無さくら緑地はこの溪谷状の地形を利用した公園で、かつての流路の攻撃斜面側に崖が続いている。

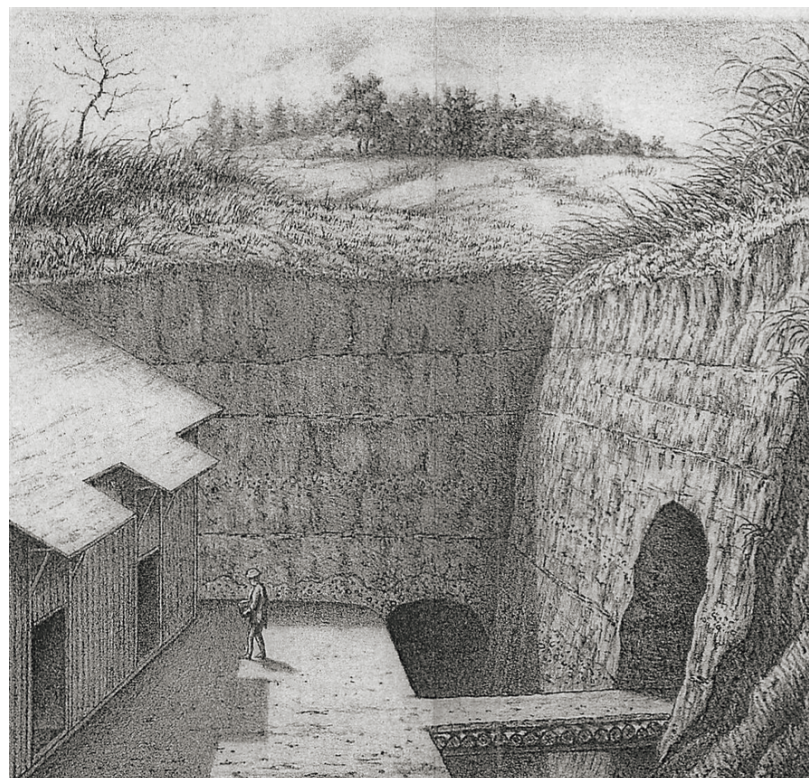


写真3 王子貝層が報告された露頭
露頭のそばには米搗きのための水車小屋があった。Brauns (1881)から転載。

1) 産総研 地質調査総合センター 地質情報研究部門 2) 神奈川大学 3) 文部科学省



写真4 音無さくら緑地のブラウンスが報告した露頭
緑地内には約6mの崖があるが、全体的に草や苔で覆われており、一部の地層しか観察できない。崖の下部約3mにシルト～砂質シルト層(写真5)が観察できる。露頭の解説板(写真6)も設置されている。



写真5 露頭下部のシルト層
Tokunaga (1906) によれば、貝化石層はシルト層よりも下に位置すると想定される。しかし、その層準は現在土砂が堆積しているため確認できない。写っている地層の層厚は約1m。



写真6 露頭に設置された解説板
解説板には、石神井川の蛇行部分の地図や Brauns (1881) が図示した王子貝層の貝化石が図示されている。



写真7 ブラウンスの名前が付いた二枚貝
Tokunaga (1906) は、王子貝層から見つかった新種二枚貝をブラウンスに因んで、ブラウンスイシカゲガイ (*Cardium braunsi* Tokunaga) として記載した。写真(中央の個体)は同じ地区から見つかった国立科学博物館登録標本。

文献

- Brauns, D. (1881) Geology of the environs of Tokio. *Memoirs of the Science Department, Tokio Daigaku*, no. 4, 1-82, pls. 1-8.
- 地質調査所百年史編集委員会編 (1982) 地質調査所百年史. 通商産業省工業技術院地質調査所創立 100 周年記念協賛会, つくば, 162p.
- Tokunaga, S. (1906) Fossils from the environs of Tokyo. *Journal of the College of Science, Imperial University of Tokyo*, 21, 1-96, pls. 1-6.

東京都内の郷土館における更新世貝化石の展示

川辺文久¹⁾

武蔵野台地東部に分布する“東京層”からは第四紀更新世の貝化石が産出する。ところが、都市化が進んだ東京都区部では化石を採集できる場所はほとんどなくなった。区立の郷土館のなかには、歴史・考古学資料のみならず、地元産の化石を所蔵・展示している施設がある。地質学への理解や興味を促す上で、郷土館の存在意義は大きい。



写真1 北区飛鳥山博物館の展示
北区十条仲原の清水坂公園内の自然ふれあい情報館建設時に採集された王子貝層の貝化石。1992年採集。同館は王子貝層を研究したブラウンスや徳永重康の功績を紹介している。

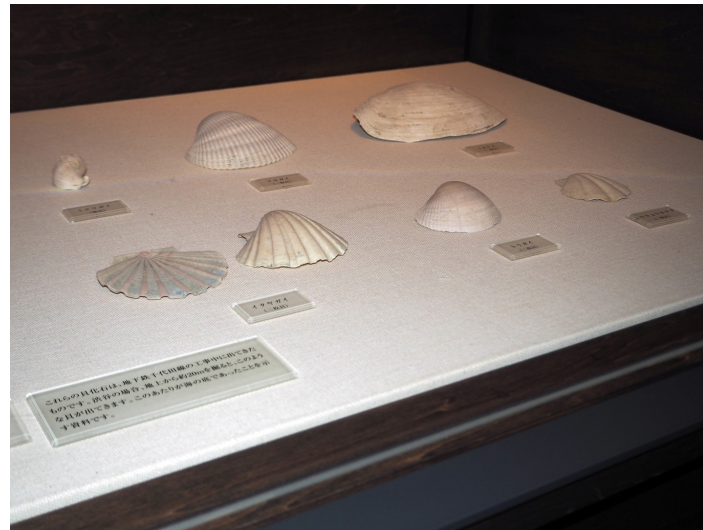


写真2 白根記念渋谷区郷土博物館・文学館の展示
渋谷区神宮前の地下鉄千代田線工事の際に採集された貝化石14種が展示されている。1971年採集。同館には同地点から採集されたナウマンゾウのレプリカ展示もある。



写真3 目黒区めぐろ歴史資料館の展示
東急東横線中目黒駅付近の蛇崩川^{じやくづれがわ}で採集された貝化石密集層のブロックが野外に展示されている。ミルクイ、イタヤガイ、ヤツシロガイなどが確認される。

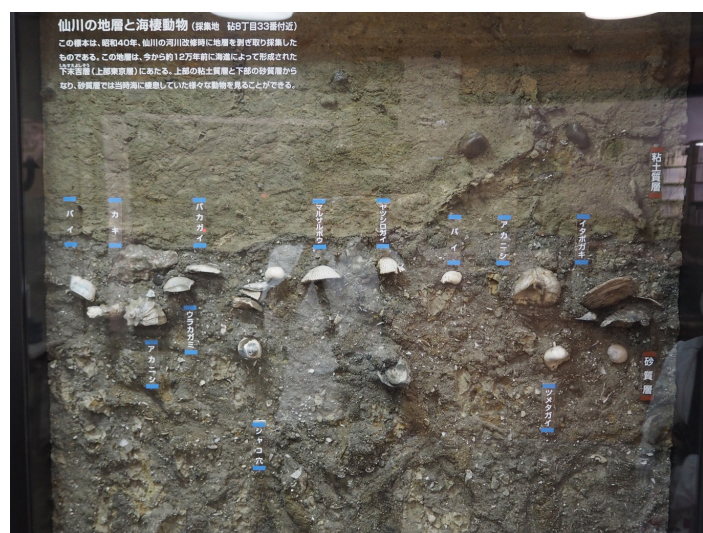


写真4 世田谷区立郷土資料館の展示
小田急線成城学園前駅付近の仙川の河川改修時の地層剥ぎ取り標本。1965年採集。

1) 文部科学省



写真5 板橋区立郷土資料館蔵の貝化石
1959年に板橋区徳丸七丁目で見つかった貝化石。特別展「水のゆくえ」
(平成30年1月20日～3月25日)で展示。

関連資料

- 板橋区教育委員会編（1980）成増露頭地質調査報告書，
文化財シリーズ，第32集 郷土史料集。板橋区教育委
員会，116p.
- 貝塚爽平（1979）東京の自然史 増補第二版。紀伊国屋
書店，239p.
- 川辺文久・中島 礼・加瀬友喜・田口公則・佐々木猛智・
守屋和佳（2018）東京都区部産のトウキョウホタテ
の産出記録および標本保管。GSJ地質ニュース，7，
67-79.
- 北区飛鳥山博物館編（2011）北区飛鳥山博物館常設展示
案内。北区教育委員会，120p.
- 中村新之介編（2018）平成29年度特別展「水のゆくえ」
図録。板橋区立郷土資料館，114p.



写真6 板橋区立郷土資料館蔵の剥ぎ取り標本
1979年に板橋区教育委員会が実施した成増露頭地質調査の
標本。特別展「水のゆくえ」(平成30年1月20日～3月25日)
で展示。

東京都区部産のトウキョウホタテの産出記録 および標本保管

川辺文久¹⁾・中島 礼²⁾・加瀬友喜³⁾・田口公則⁴⁾・佐々木猛智⁵⁾・守屋和佳⁶⁾

1. はじめに

東京都の平野地形は西から丘陵(多摩丘陵など)、台地(武蔵野台地)、低地(東京低地)に識別される。武蔵野台地の東部には更新世の貝化石層を含有する浅海性の堆積物が分布しており、“東京層”と呼ばれる(Yabe, 1911)。千葉県の下総台地、茨城県の常陸台地、横浜地域などにも同様の地層の分布がみられ、かつて関東平野は鹿島灘と九十九里浜に大きく開いた入り江だった時期があったとされている(貝塚, 1979; 杉原, 2008 など)。“東京層”は渋谷区代々木公園で掘削されたボーリングコアを模式として中部から上部更新統の堆積物と定義されているが(遠藤ほか, 1996)、明らかな年代指標は得られていない。武蔵野台地の地質については明治期以来、長い研究の歴史を有しているにも関わらず、“東京層”の層序学的な位置付け、ならびに都内各地で発見された貝化石層の層位関係は未解決のままとなっている(菊地, 1980)。また、人口が集中する平野部におけるインフラ整備計画や防災対策のためにも都市地質の解明が求められている(中島ほか, 2017 など)。

2016年の地質の日(5月10日)、日本地質学会は、郷土への愛着と大地の性質や成り立ちへの関心を喚起することを目的に、全国47都道府県の石(岩石、鉱物、化石)を選定した。東京都の化石として選ばれたのはトウキョウホタテである。本種は、東京都北区の王子駅付近に露出していた貝化石層の標本に基づいて提唱され、東京に因んで *Pecten tokyoensis* と命名された(Tokunaga, 1906)。昭和40年代頃まで、武蔵野台地東端の崖、台地を刻む石神井川や神田川沿いの露頭、鉄道工事やビル建設の現場など都内各地から本種を含むさまざまな第四紀貝化石が多数採集されてきた。

トウキョウホタテは北海道南部から九州、濟州島、台

湾に至る後期鮮新世から後期更新世の地層において産出することが知られるようになり(天野, 2002; 中島ほか, 2016)、新生代後期の化石の代表例としてこれまでに図鑑や博物館の展示等でしばしば紹介されている。また、教科書教材として取り上げられることもあり、たとえば、小学校6年理科(石浦ほか, 2015)では地域の自然教材として、中学校1年理科(霜田ほか, 2012)や高等学校地学基礎(森本ほか, 2017)では第四紀の示準化石としてトウキョウホタテの写真が掲載されている。下総台地や常陸台地での野外実習でトウキョウホタテを採集した経験をもつ中高生や大学生もいることだろう。ところが、都市化が進んだ武蔵野台地東部では“東京層”の露頭のほとんどが消滅しているため、貝化石の専門家でない限り、東京都産のトウキョウホタテ標本を目にする機会は乏しいのが現状である。

著者らは、都市の地質情報への関心が高まっていることやトウキョウホタテが東京都の化石に選定されたことをきっかけに、武蔵野台地と荒川以西の東京低地にかけての範囲で本種の産出記録と標本の保管状況を調査した。本稿前半では、我が国の地質学の黎明期以来の文献に基づいて東京都区部の貝化石層とトウキョウホタテの産出の記録を整理し、後半ではこれらの文献で使用された標本の保管状況、博物館での展示状況および公益性のある未公表標本について記述する。本稿の目的は都市地質に対する興味関心の喚起、ならびに地質学の研究における標本の利活用の一助として、後世に伝えるべき標本や資料を紹介することである。

なお、イタヤガイ科ホタテガイ属の *Mizuhopecten tokyoensis* (Tokunaga, 1906) には、トウキョウホタテ *M. tokyoensis tokyoensis* とホクリクホタテ *M. tokyoensis hokurikuensis* の2亜種が認められているが(Akiyama, 1962; Masuda, 1962)、本稿では前者のみを対象とし、

1) 文部科学省 〒100-8959 千代田区霞が関3-2-2

2) 産総研地質調査総合センター 地質情報研究部門

3) 神奈川大学理学部 〒259-1293 平塚市土屋2946

4) 神奈川県立生命の星・地球博物館 〒250-0031 小田原市入生田499

5) 東京大学総合研究博物館 〒113-0033 文京区本郷7-3-1

6) 早稲田大学教育・総合科学学術院 〒169-8050 新宿区西早稲田1-6-1

キーワード：東京、トウキョウホタテ、産出記録、標本

学名表記は出典どおりに記述する。

2. 東京都区部の貝化石層とトウキョウホタテの産出記録

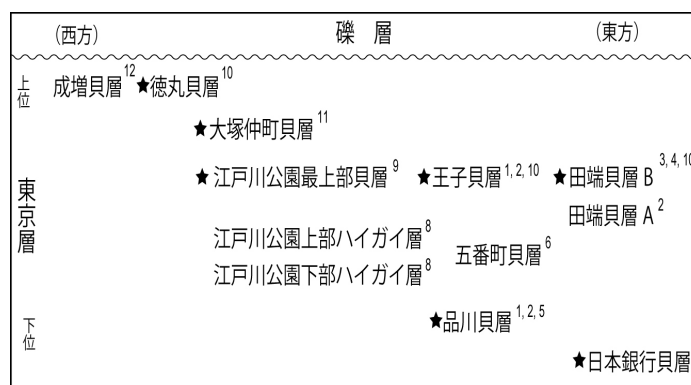
明治12(1879)年にエドムント・ナウマンの後任として東京大学教授に招聘されたダーフィット・ブラウスは、東京・横浜周辺の地質調査に取り組んだ(Brauns, 1881)。その調査の中で、王子地域(滝野川地域)の王子神社(王子権現)と金剛寺(紅葉寺)の間の石神井川河岸から巻貝類26種、掘足類2種、二枚貝類33種を、駿河台の神田川の掘割から巻貝類7種、掘足類1種、二枚貝類17種を、品川の鉄道脇の崖から巻貝類13種、掘足類1種、二枚貝類21種、腕足動物1種を採集し、計75種を記載した。ただし、これらの貝化石を含む砂層や泥層は鮮新統とされた。ブラウスの王子貝層は今日、武蔵野台地における貝化石層の代名詞となっているが、ブラウスの調査以前の文献『日本産物誌 武蔵部上巻』(伊藤, 1872)には王子滝野川産のハマグリとカキの化石が挿絵付きで紹介されている。江戸時代からすでに王子地域は貝化石産地として知られていたようである。王子貝層の初期の研究については『北区史 通史編原始古代』(北区史編纂調査会, 1996)に詳しい記述がある。

東京大学で動物学と地質学を学び、のちに日本古生物学会第二代会長を務めた徳永重康(旧姓:吉原)は、王子の南東約3 kmに位置する東北本線田端駅構内の崖から巻貝類27種、二枚貝類15種を、王子で巻貝類45種、掘足類2種、二枚貝類48種、腕足動物1種を、品川で巻貝類47種、掘足類3種、二枚貝類52種、腕足動物2種

を採集し、絶滅種を含む計165種の軟体動物化石を記載した(Tokunaga, 1906)。そして、絶滅種と現生種の比率ならびに田端産の象化石に基づいて、これらの貝化石を含有する地層を更新統とした。この研究のなかで、王子産の多数の標本をもとに *Pecten tokyoensis* を提唱し、Brauns(1881)が *Pecten plica* として記載・図示した標本を本種とみなした。この時点では田端と品川から *Pecten tokyoensis* は報告されていない。徳永の論文には、分類学的研究に加えて、化石群組成の調査に基づく寒暖の議論や、柱状図付きで上記3地点の層相を比較することによる各貝化石層の層位関係の考察が含まれており、我が国における新生代貝化石研究の礎を築く論考だったといえる。

徳永は以後研究対象を哺乳類化石と炭田調査に移した。武蔵野台地の貝化石は横山又次郎、矢部長克、山川戈登、榎山次郎、大塚彌之助、福田 理ら他の学者によって研究されることになり、王子、田端、品川など従来から知られた地点のほか、都内各所から貝化石層が報告されるようになった(第1図)。東京都区部の貝化石層については、福田・安藤(1951)や菊地(1980)による包括的なレビューがあるので参照されたい。本稿では以下、トウキョウホタテに関わる内容を中心に紹介する。

二十世紀初頭、山川戈登は、Tokunaga(1906)による田端の調査地点から北に一丁(約109 m)距離を置く山手線敷設時にできた崖から、従来のものとは化石群組成の異なる貝化石層(巻貝8種、掘足類1種、二枚貝類26種)を発見し、*Pecten tokyoensis* が「可なり多し」と報告した(山川, 1908a)。この貝化石層の記録は、のちに“東京層”を提唱したYabe(1911)で利用された。戦後の研究に



第1図 東京都区部の主な貝化石層。菊地(1980)に加筆・修正。星印はトウキョウホタテの産出記録がある貝化石層。ただし徳丸貝層と大塚仲町貝層からの同種の産出は稀である。1: Brauns(1881)。2: Tokunaga(1906)。3: 山川(1908a)。4: Yabe(1911)。5: Watanabe(1916)。6: 大塚(1932)。7: 徳永(1933)。8: 大炊御門(1936)。9: 尾崎ほか(1951)。10: 福田・安藤(1951)。11: 氏家(1952)。12: 菊地(1980)。このほかに駿河台貝層(Brauns, 1881)、車町貝層(山川, 1908b)、千駄ヶ谷貝層、道灌山貝層(Yokoyama, 1927)、新庚申塚貝層(大塚, 1936)などがある。貝化石層の地理的位置は杉原(2008, p. 333)で図示されている。

において福田・安藤(1951)は、都内各所の貝化石層の層位関係について検討したなかで、Tokunaga(1906)の化石層を田端貝層 A(下位)、山川(1908a)の化石層を田端貝層 B(上位)と区別して呼び、田端貝層 B と王子貝層の貝化石群との間に本質的な差がないとした。

地質調査所(現・産業技術総合研究所地質調査総合センター)の渡邊久吉は、鉄道敷設工事によってできた品川八ツ山鉄橋付近(当時の品川駅脇)の崖から巻貝 38 種、掘足類 3 種、二枚貝 46 種を採集し、*Pecten tokyoensis* の産出を報告した(Watanabe, 1916; 渡邊, 1916)。

1920 年代になると、矢部長克、横山又次郎、槇山次郎が南関東の貝化石群組成を統括し、さらに、化石群組成に基づいた古気候論を展開した。『日本洪積世気候論』(矢部, 1922)では Tokunaga(1906)の記載をもとに“東京層”の貝化石目録が作成され、「王子にて *Pecten tokyoensis* が夥多」と記された。Yokoyama(1927)は、東京大学地質学教室所蔵のブラウンス、徳永重康、山川戈登らが採集した標本に基づいて、王子、田端、道灌山、車町、品川、千駄ヶ谷での貝類各種の産出の有無を表にまとめた。その表において、*Pecten tokyoensis* は王子、田端、品川で産出有とされた。また、槇山(1930)は“東京層”のなかに見られる代表的貝化石産地として初めて板橋をあげ、*Pecten tokyoensis* ほかに 16 種を報告した。板橋の調査の対象は滝ノ川(王子)から遠くない場所で、ブラウンスが調査した王子の紅葉寺や水車場の露頭と同一の地層としているが、具体的な地点は示されていない。

一方、大塚彌之助は、専門書『第四紀』(大塚, 1931)で「東京市の近郊田端・王子・板橋・品川等の山ノ手と下町との境界の崖に露出する貝層は昔から多くの学者に気づかれてきた。」と記し、普及書『日本島の生ひ立ち』(大塚, 1948)で武蔵野台地の崖下の貝化石層の例として田端産の貝類を和名で列挙した。ここに「トウキョウホタテガヒ」が登場する。

1930 年代、麴町五番町(現在の千代田区一番町)英国大使館前海拔 25 m 地点の地下 15 m(大塚, 1932)、豊島区新庚申塚停留所傍海拔 25 m 地点の地下 20 m(大塚, 1936)、文京区関口江戸川公園の崖下の神田川河床下 0.5 m と 2.5 m 付近(大炊御門, 1936)の武蔵野台地東部で貝化石層が発見された。また、東京低地にあたる日本銀行本店敷地でも海水準位の下約 15 m から貝化石が発見された(徳永, 1933)。これらのうち、新庚申塚と日本銀行の貝化石層で *Pecten tokyoensis* の産出が報告されている(第 1 図)。

大炊御門(1936)が報告した貝化石層(第 1 図の江戸川

公園下部・上部ハイガイ層)の上位には、戦後になって巻貝 20 種、掘足類 1 種、二枚貝類 28 種からなる貝化石層(第 1 図の江戸川公園最上部貝層)が発見され、*Pecten (Patinopecten) tokyoensis* の産出が報告された(尾崎ほか, 1951)。尾崎ほか(1951)には「早稲田大学の直良信夫講師の談によると、同大学政経学部建築当時の基礎工事中に、灰色粘土層の下から *Pecten (Patinopecten) tokyoensis* Tokunaga を多産したと云う。」とあり、神田川を挟んだ江戸川公園と早稲田大学構内で、本種が同一層準から産出したものと判断されている。なお、この論文には和名「トウキョウホタテ」が明記されている。

江戸川公園の北北東 1.5 km の大塚仲町(現在の文京区大塚)では二枚貝類 21 種の印象化石が発見され、*Patinopecten cf. tokyoensis* が稀に産出すると報告された(氏家, 1952)。

東京都区部西北地域の板橋区徳丸では、巻貝 13 種、掘足類 2 種、二枚貝類 34 種からなる貝化石層が発見され、*Pecten (Patinopecten) tokyoensis* が稀に産出すると報じられた(福田・安藤, 1951; 尾崎ほか 1957)。なお、徳丸の西北西 2 km 程に位置する赤塚四丁目の成増露頭(成増厚生病院裏の大露頭)から巻貝類 18 種、掘足類 2 種、二枚貝類 41 種が報告されたが、トウキョウホタテの産出記録はない(菊地, 1980)。

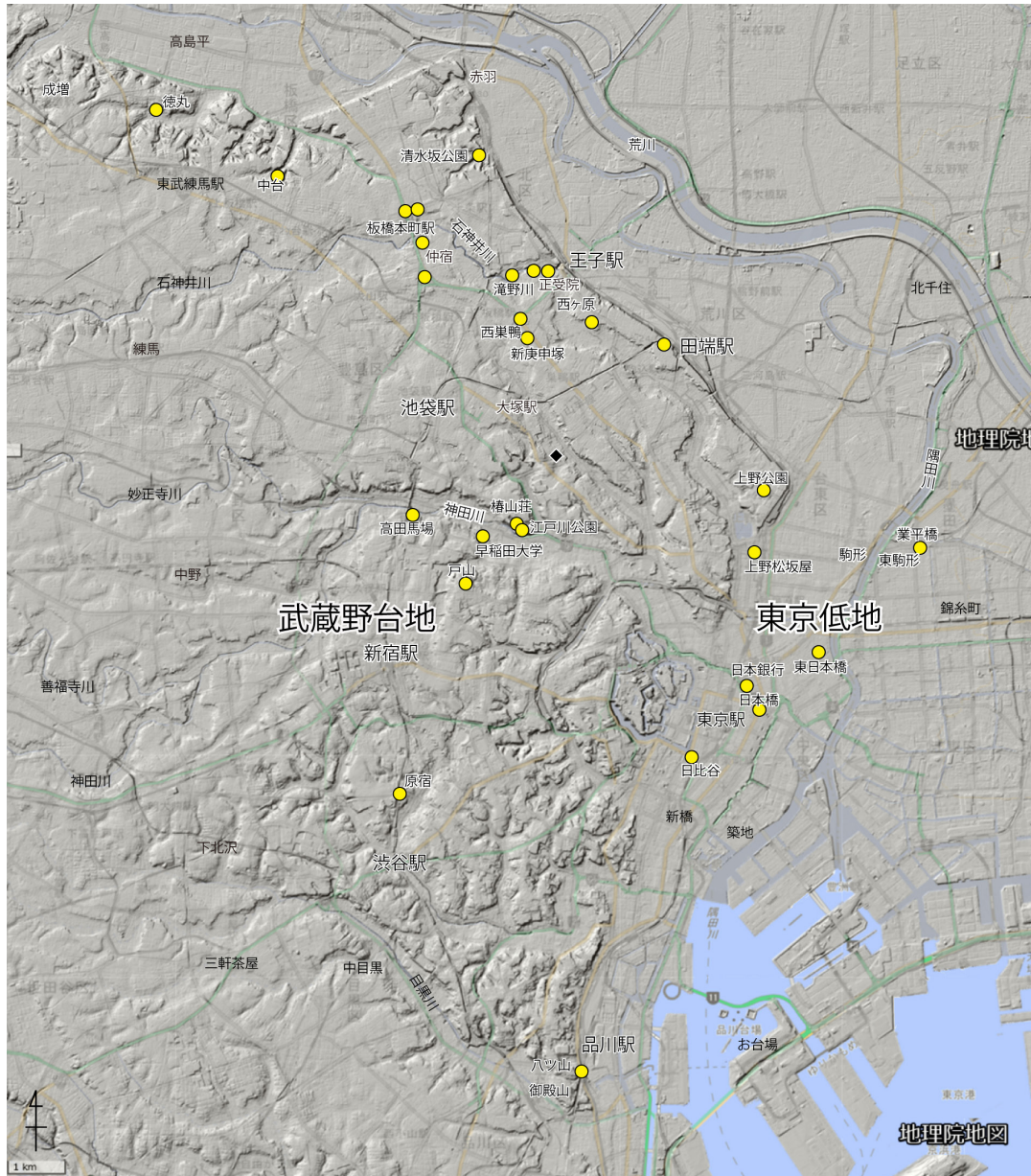
東京都区部西南地域の世田谷区喜多見、^{かみのげ}上野毛、^{とどろき}等々力でも“東京層”の貝化石が発見されたが、トウキョウホタテに関する報告はない(寿円, 1966)。

3. 東京都区部産のトウキョウホタテ標本の保管・展示状況

前章で述べた先行研究の図示・参照標本の所在に加えて、展示物や未公表の収蔵物についても調査した。その結果、東京大学総合研究博物館、国立科学博物館筑波研究施設、神奈川県立生命の星・地球博物館、早稲田大学本庄考古資料館、産業技術総合研究所地質調査総合センター地質標本館、東北大学総合学術博物館、北海道大学総合博物館に東京都区部で採集されたトウキョウホタテ標本が保管されており、白根記念渋谷区郷土博物館・文学館、北区飛鳥山博物館では地元産トウキョウホタテが展示され、板橋区立郷土資料館には地元産標本が所蔵されていることが分かった。産地は 12 区 29 地点に及ぶ(第 2 図, 第 1 表)。

3.1 東京大学総合研究博物館

本機関には明治期以来の標本が論文毎に管理されている(第 3 図 A)。そのなかで、Tokunaga(1906)で使用さ



第2図 東京都区部のトウキョウホタテの産地。●：東京大学総合研究博物館，国立科学博物館筑波研究施設，神奈川県立生命の星・地球博物館，早稲田大学本庄考古資料館，白根記念渋谷区郷土博物館・文学館，北区飛鳥山博物館，板橋区立郷土資料館の所蔵標本に基づく（表1を参照）。◆：論文報告はあるが標本の所在は未確認。この図の範囲外の江戸川区小松川二丁目のボーリングコアからも産出記録がある。背景図は「地理院地図」の標準地図と陰影起伏図を合成したもの。

れた北区王子産の41標本(CM 13643-13673, 13791-13800)が*Pecten tokyoensis*のシタイプとして登録されている。標本は、殻長100 mmを超える保存状態の良好なもの(第3図B上, 右殻; 佐々木・伊藤, 2012, p.71, 左殻)に加えて、殻長10 mm程の小型のもの(第3図B下)も多い。添付された古いラベルには「Type specimen」, 「Registered by Gordon Y.」とあり、山川戈登も関与した標本群であることが分かる。ただし、CM 13649(Tokunaga, 1906, pl.5, fig.7)など数点が紛失している。

武蔵野の貝化石一覧を作成したYokoyama (1927)の参照標本として、王子産のCM 24123, 田端産のCM 24124(第3図Cに示す標本のほかに2標本), 品川産のCM 24125(第3図Dに示す3標本)が保管されている。

大塚(1936)では豊島区巣鴨新庚申塚産の標本に東京大学地震研究所保管の標本番号(Rg. 3143)が付されたが、現在は東京大学総合研究博物館で登録管理(CM 31243)され、大塚彌之助直筆の標本ラベルが添えられている(第3図E)。

第1表 東京都区部産のトウキョウホタテ標本の所在 (2017年11月, 首都圏機関所蔵).

産地	所蔵(登録番号/コレクション)	関連文献, 採集者, 本論の図など
板橋区 徳丸五丁目(旧徳丸本町石川の三叉路の角の民家裏の崖;徳丸貝層模式地)	国立科学博物館(P1 4064)	福田・安藤(1951), 尾崎ほか(1957), 第4図A
中台1-19-8 どんぶり山公園	国立科学博物館(山浦一郎コレクション:ドングリ山)	山浦一郎採集(1967)
本町13-13 朝日湯(2015年廃業)付近	国立科学博物館(横浜国立大学コレクション)	鹿間時夫・鎮西清高採集, 第4図C
大和町17-1 地下鉄三田線「板橋本町駅」工事場	国立科学博物館(山浦一郎コレクション:大和町)	山浦一郎採集(1967, 1968), 第4図G
仲宿 下水道工事場	国立科学博物館(山浦一郎コレクション:仲宿)	山浦一郎採集
仲宿 下水道工事場	板橋区立郷土資料館	川辺・芳賀(2018), 山浦一郎採集
板橋2-66-1 板橋区役所工事場	板橋区立郷土資料館(10417)	川辺・芳賀(2018), 第7図C
石神井川河岸 地下8~10 m(位置不明)	板橋区立郷土資料館(20049, 20050)	川辺・芳賀(2018), 岩渕七郎採集
北区 十条仲原4-2-1 清水坂公園内自然ふれあい情報館建設工事場	北区飛鳥山博物館	中野守久採集(1992.10), 常設展示, 第7図B
王子・滝野川地区(石神井川沿い)	東京大学総合研究博物館(シタイプ:CM 13643-13673, 13791-13800)	Tokunaga(1906), 第3図A, B
王子・滝野川地区(石神井川沿い)	東京大学総合研究博物館(CM 24123)	Yokoyama(1927)
王子・滝野川地区	国立科学博物館(山浦一郎コレクション:王子)	山浦一郎採集(1959), 第4図F
滝野川2-49-5 正受院裏の崖	国立科学博物館(PM 27847, 27848)	福田 理採集(1950)
滝野川四丁目(正受院から石神井川沿い1 km上流;旧滝野川町1188番地)	国立科学博物館(P1 4096)	尾崎ほか(1951), 第4図B
西ヶ原	神奈川県立生命の星・地球博物館(KPM-NN 4154)	常設展示, 第5図A
田端六丁目 山手線田端駅付近工事場	東京大学総合研究博物館(CM 24124)	Yokoyama(1927), 第3図C
豊島区 西巢鴨三丁目 地下鉄三田線「西巢鴨駅」工事場	国立科学博物館(山浦一郎コレクション:巢鴨)	山浦一郎採集
西巢鴨三丁目 都電新庚申塚停留場傍の海拔25 m地点の地表下20 m	東京大学総合研究博物館(CM 31243)	大塚(1936), 第3図E
文京区 関口2-1 江戸川公園	国立科学博物館(PM 8217)	尾崎ほか(1951), 第4図D
関口2-1 江戸川公園	神奈川県立生命の星・地球博物館(KPM-NN 4108)	
関口2-10-8 椿山荘工事場	神奈川県立生命の星・地球博物館(KPM-NN 31608, 31616)	松島義章採集, 第5図B
新宿区 高田馬場一丁目 地下鉄東西線「高田馬場駅」工事場	早稲田大学本庄考古資料館(直良信夫コレクション)	
西早稲田1-6-1 早稲田大学政経学部工事場	早稲田大学本庄考古資料館(直良信夫コレクション)	守屋(2017)
戸山1-21-1 国立第一病院工事場地下24~25 m(現・国立国際医療研究センター)	国立科学博物館(P1 7463)	竹内隆寄贈(1968.9)
渋谷区 神宮前六丁目 神宮橋下 地下鉄千代田線「明治神宮前(原宿)駅」工事場地下21 m(海拔16 m)	白根記念渋谷区郷土博物館・文学館	長谷川善和採集(1971), 常設展示, 第7図A
品川区 品川駅付近	東京大学総合研究博物館(CM 24125)	Yokoyama(1927), 第3図D
台東区 上野3-29-5 上野松坂屋工事場	早稲田大学本庄考古資料館(直良信夫コレクション)	第6図A
上野公園9-83 上野動物園内地下工事場	国立科学博物館(PM 27886)	第4図E
墨田区 業平一丁目 地下鉄浅草線工事場	国立科学博物館(山浦一郎コレクション:駒形)	山浦一郎採集(1959).
江戸川区 小松川2-3 ボーリングコア(GS-KM-1C)	産業技術総合研究所地質調査総合センター地質標本館	中島ほか(2004)
中央区 日本橋本石町2-1-1 日本銀行本店第二期工事場の海水準位の約15 m	早稲田大学本庄考古資料館(直良信夫コレクション)	守屋(2017)
日本橋1-4-1 白木屋工事場(現・コレド日本橋)	早稲田大学本庄考古資料館(直良信夫コレクション)	
東日本橋三丁目 地下鉄浅草線「東日本橋駅」工事場	国立科学博物館(山浦一郎コレクション:日本橋橋町)	山浦一郎採集
千代田区 有楽町1-8-1 日比谷日活国際会館工事場(現・ペニンシュラ東京)	早稲田大学本庄考古資料館(直良信夫コレクション)	第6図B



第3図 東京大学総合研究博物館所蔵の東京都区産トウキョウホタテ。スケールは10mm。A: Tokunaga (1906) のトウキョウホタテ標本の保管状況。B: CM 13651 (Tokunaga, 1906, pl. 5, fig.9) と CM 13643 (Tokunaga, 1906, pl. 5, fig.1) 。ともに王子産。C: CM 24124, Yokoyama (1927) の田端産参照標本。D: CM 24125, Yokoyama (1927) の品川産参照標本。E: CM 31243, 大塚 (1936) の巢鴨新庚申塚産参照標本で、原著では東京大学地震研究所番号 (Rg. 3143) が付されていた。

3.2 国立科学博物館

上野本館には千葉県市原市瀬又産の大型標本(右殻)が展示されている。一方、同館筑波研究施設には東京都区部で採集された標本が多数収蔵されている。1950年代に尾崎博、福田理、安藤保二が研究した東京都産貝化石の参照標本に登録番号が付されており、トウキョウホタテについては以下に列挙する標本がある。福田・安藤(1951)によって発見された徳丸貝層の模式地(1950年時点で板橋区徳丸本町石川の三叉路の角の民家裏の崖で、近隣に防空壕があった。当地は土地区画整理され、現在の徳丸五丁目13付近)で採集された標本P1 4064(第4図A;尾崎ほか, 1957, pl. 29, fig.20), 尾崎ほか(1951)が滝野川町1188番地(現在の北区滝野川四丁目)の石神井川左岸で採集・報告した標本P1 4096(第4図B), 福田理が1950年に滝野川二丁目の正受院裏の崖で採集した標本PM 27847と27848, 尾崎ほか(1951)が報じた文京区関口二丁目の江戸川公園の標本PM 8217(第4図D; 図示したものの他に小型標本が14点ある)。

その他の登録標本(2017年11月時点)として、新宿区戸山一丁目の国立第一病院(現・国立国際医療研究センター)工事場地下24~25mで得られた標本P1 7463と上野動物園内地下工事場で採集された標本PM 27886(第4図E)がある。

国立科学博物館では大学での管理が困難となった自然史標本の受け入れを進めている(清家ほか, 2015など)。2016年には横浜国立大学のコレクションが移管され、そのなかに鹿間時夫、鎮西清高が板橋区本町の朝日湯(2015年廃業の銭湯)付近で採集した大型のトウキョウホタテ標本がある(第4図C)。

同博物館には化石収集家から寄贈された標本も数多く所蔵されている。板橋区の中学校教諭の山浦一郎が東京及び近郊で採集した第四紀貝化石が1981年8月14日に遺族より寄贈された。この標本群は「山浦一郎コレクション」と呼ばれており、収蔵棚の引き出し約100段分の標本が産地ごとに整理されている(第4図F)。採集地点を詳細に記した地図は残されていないが、標本に添付されたラベルやメモならびに板橋区立郷土資料館が所有する同氏に関わる資料に基づくと、北区の王子地域(1959年採集)、板橋区大和町の地下鉄三田線板橋本町駅工事場(1967, 1968年採集; 第4図G), 板橋区仲宿の下水道工事場(1967年採集), 板橋区中台一丁目のどんぐり山公園, 豊島区西巣鴨三丁目の地下鉄三田線西巣鴨駅工事場(コレクションでは「巣鴨」), 墨田区業平一丁目の地下鉄浅草線工事場(1959年採集, コレクションでは「駒形」), 中央区東日

本橋三丁目の地下鉄浅草線東日本橋駅工事場(コレクションでは「日本橋橋町」)で採集されたトウキョウホタテ標本が含まれている。これらは1950~60年代の地下鉄工事や下水道工事の際に採集された標本が多いのが特徴である(地下鉄浅草線の本所吾妻橋駅は1960年開業, 東日本橋駅は1962年開業。地下鉄三田線は1965年12月に工事着工, 1968年12月開業)。

3.3 神奈川県立生命の星・地球博物館

本機関の常設展示「ジャンボブック展示室櫻井化石コレクション」のなかで、北区西ヶ原産のトウキョウホタテ(KPM-NN 4154)が展示されている(第5図Aの展示標本のほかに複数の小型標本がある)。収蔵庫には文京区関口二丁目の江戸川公園産(KPM-NN 4108)と椿山荘^{ちんざんそう}の増幅工事の際に採集された標本(KPM-NN 31616, 31608; 第5図B)がある。椿山荘工事場の標本は同館の松島義章が採集したもので、この貝化石層の写真が杉原(2008)に掲載されている。

3.4 早稲田大学本庄考古資料館

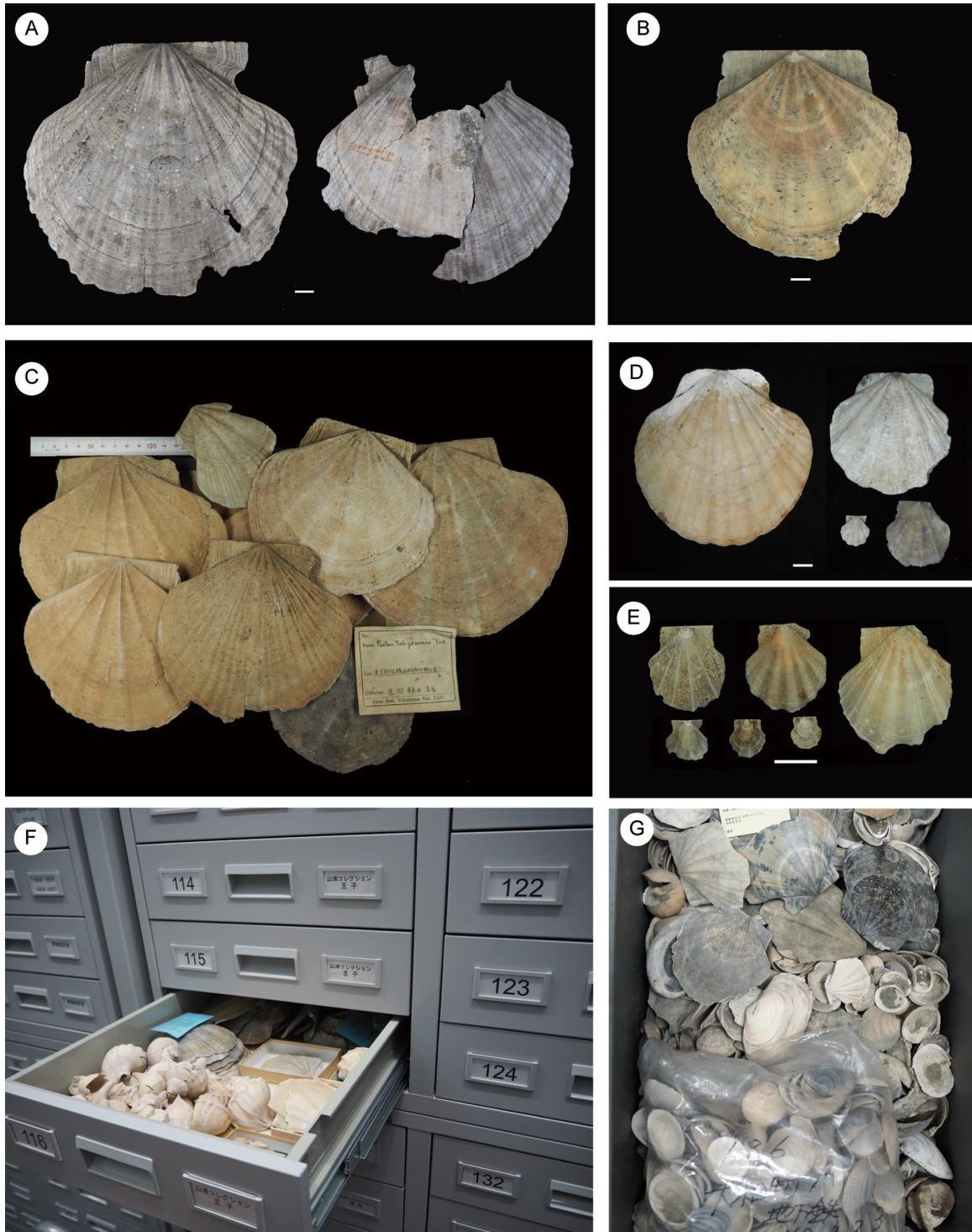
考古学者の直良信夫ゆかりの無脊椎動物化石の標本が、かつて早稲田大学理工学部や本庄高等学院の教職員によって整理・保管されていた。現在は早稲田大学本庄考古資料館が所蔵している。

新宿区の地下鉄高田馬場駅工事場、西早稲田一丁目の早稲田大学構内、台東区上野三丁目の松坂屋工事場(第6図A), 中央区日本橋一丁目の白木屋(現・コレド日本橋)工事場、日本橋本石町二丁目の日本銀行本店敷地、千代田区有楽町一丁目の日比谷日活国際会館(現・ペニンシュラ東京)工事場(第6図B)で採集された貝化石標本群のなかに、トウキョウホタテが確認される。

なお、守屋(2017)が日本銀行敷地と早稲田大学構内のトウキョウホタテ標本を図示している。

3.5 産業技術総合研究所地質調査総合センター地質標本館

東京低地の江戸川区小松川二丁目3番地で掘削されたボーリングコア(GS-KM-1C)の更新統層準(標高約-67m)から、トウキョウホタテが多数産出し(中島ほか, 2004), 地質標本館に登録されている(GSJ F18322)。このボーリングコアは沖積層を対象としたものであるが、トウキョウホタテの産出により沖積層と更新統との境界が認定された。年代は特定できないが、産出標高から武蔵野台地のトウキョウホタテ産出層準よりも下位層準と推定される。



第4図 国立科学博物館筑波研究施設所蔵の東京都区産トウキョウホタテ。スケールは10mm。A: P1 4064, 福田・安藤(1951)の参照標本, 板橋区徳丸五丁目産。B: P1 4096, 尾崎ほか(1951)の参照標本, 北区滝野川四丁目産。C: 横浜国立大学からの移管標本, 板橋区本町産。D: PM 8217, 尾崎ほか(1951)の参照標本, 文京区関口二丁目の江戸川公園産。E: PM 27886, 上野動物園内産。F: 山浦一郎コレクションの収蔵状況。約100段の引き出しに納められている。G: 山浦一郎コレクションの標本, 板橋区大和町の地下鉄三田線板橋本町駅工事場産。

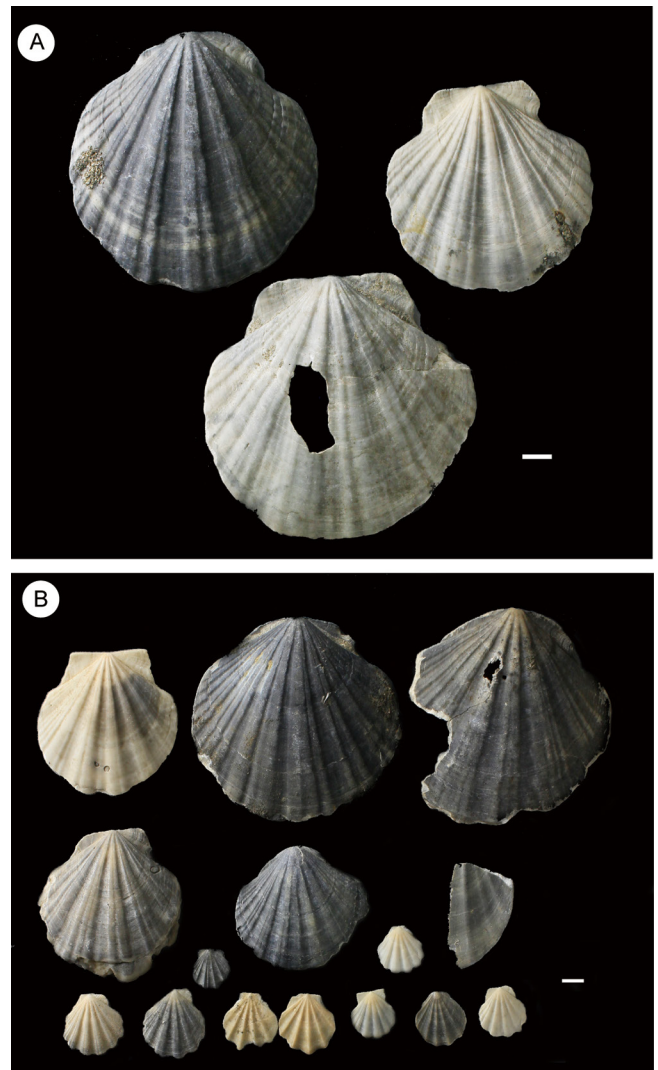
3.6 区立施設

東京都区部には郷土博物館・資料館が多数ある。そのうち、つぎの3館が地元産のトウキョウホタテを保有している。

1971年、地下鉄千代田線の工事が行われていた渋谷区神宮前の山手線原宿駅に隣接する神宮橋の直下で、ナウマンゾウ一体分の全身骨格化石が発見された。層位は東京礫層より1mほど上位の“上部東京層”とされる(貝塚,



第5図 神奈川県立生命の星・地球博物館所蔵の東京都区部産トウキョウホタテ。A:常設展示標本(右:KPM-NN 4154,北区西ヶ原産)。B:文京区関口二丁目の橋山荘工場産(左:KPM-NN 31616, 右:KPM-NN 31608)。



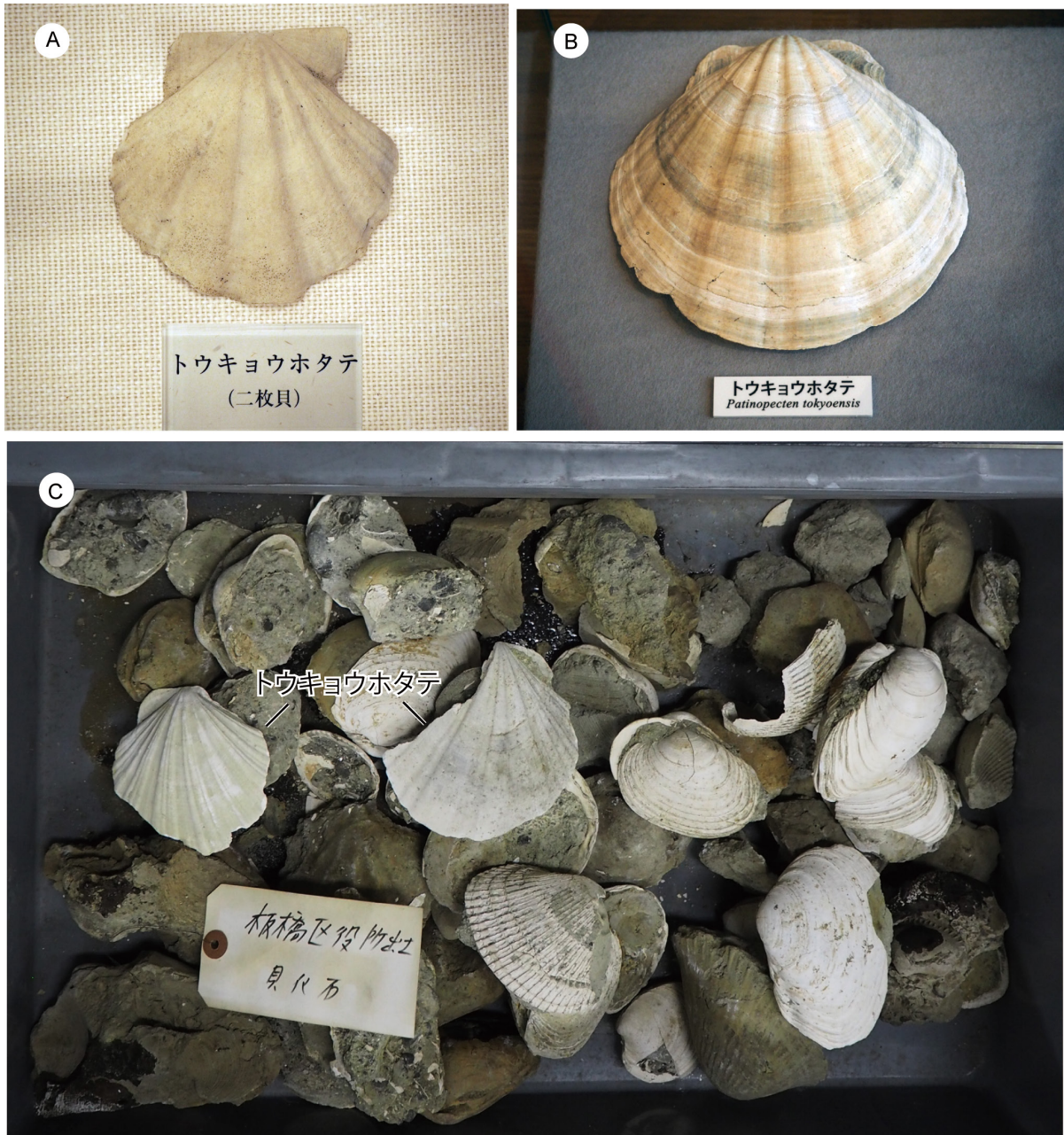
第6図 早稲田大学本庄考古資料館所蔵の東京都区部産トウキョウホタテ。スケールは10mm。A:台東区上野三丁目の松坂屋工場産。B:千代田区有楽町一丁目の日比谷日活国際会館工場(現・ペニンシュラ東京)産。

1979)。これと同一層準から発見された貝化石が白根記念渋谷区郷土博物館・文学館(渋谷区東四丁目9-1)で常設展示されており(川辺, 2018, 写真2), このなかにトウキョウホタテが含まれている(第7図A)。これらの貝化石はナウマンゾウの発掘調査にあたった国立科学博物館から提供されたものである。同館筑波研究施設の収蔵庫にも同所産の貝化石(PM 27849-27879)が保管されているが、神宮前産トウキョウホタテはこの展示物のみである。

北区飛鳥山博物館(北区王子一丁目1-3)は、東京の地形と地質、氷河性海水準変動、広域テフラ、貝化石、関東ローム層など第四紀に関わる展示が充実しており、ブラウンスと徳永重康の功績や王子貝層についても紹介している。1992年、北区十条仲原四丁目の清水坂公園内の自然ふれあい情報館建設の際に発見された貝化石層から同館学芸員の中野守久が採集し、神奈川県立博物館(当時)の松島義章が鑑定した標本が保管されている。タマキガイが優占し、次いでトウキョウホタテ(約10標本)、ビノスガイ、カガミガイが多い。これら採集標本の一部が常設展示

されている(川辺, 2018, 写真1; 第7図B)。

武蔵野台地東部の地層見学地として全国的に知られた成増露頭の近くに板橋区立郷土資料館(板橋区赤塚五丁目35-25)がある。同館には、1979年に板橋区教育委員会が実施した成増露頭地質調査の際に採集された貝化石と地層剥ぎ取り標本(川辺, 2018, 写真6), 調査時の露頭写真, 1960年代に区内で発見されたナウマンゾウ化石が保管されている。さらに、国立科学博物館の「山浦一郎コレクション」と出処を同じくする成増露頭、徳丸ボウズ山(徳丸七丁目辻山地区)、仲宿(下水道工事場)、大和町(地下鉄三田線工事場)の貝化石コレクション、および板橋区役所建設現場や石神井川河岸地下8~10mで採集された区内産貝化石が保管されている。2017年11月時点で確認された同館の第四紀貝化石コレクションは巻貝類47種、



第7図 区立施設所蔵の東京都区産トウキョウホタテ。A：白根記念渋谷区郷土博物館・文学館で展示されている神宮前産の標本。B：北区飛鳥山博物館で展示されている十条仲原産の標本。C：板橋区立郷土資料館に保管されている板橋区役所建設現場(板橋二丁目)で採集された標本。

掘足類 1 種，二枚貝類 60 種で，トウキョウホタテについては仲宿，板橋区役所工事場(第 7 図 C)，石神井川河岸で採集された標本が保管されている。板橋区立郷土資料館の第四紀貝化石コレクションの詳細については，川辺・芳賀(2018)を参照されたい。

3.7 その他

東北大学総合学術博物館に IGPS no. 4737(東京市品川産の 4 標本)，IGPS no. 4740(東京市武州王子滝野川産の 10 標本)，IGPS no. 13415A(東京市武州滝野川産の 21 標本)

本)，IGPS no. 13415B(東京市滝野川産の 5 標本)，IGPS no. 90665(王子産の 27 標本)が登録されている。北海道大学総合博物館には UHR 02917(東京市外王子：ラベルのみ)，UHR 00349(武蔵国滝ノ川産の 2 標本)がある。産地表記とラベルから判断すると，いずれも戦前の採集物である。

3.8 所在が確認されなかった図示・参照標本

本調査では Brauns(1881, pl.7, fig. 30)で *Pecten plica* として図示され，Tokunaga(1906)が *Pecten tokyoensis*

と見なした標本の存在は確認できなかった。なお、石神井川右岸の音無さくら緑地(北区王子本町一丁目6)はブラウンスが調査した水車場の露頭(Brauns, 1881, pl. 1, fig. 4)があった場所とされ、保存露頭の解説看板にはこの標本の図が刻印されている(中島ほか, 2018)。

山川(1908a)が最初に報告した山手線沿いの田端貝層B(第1図)では、*Pecten tokyoensis*が多産するとされている(Yabe, 1911; 矢部, 1922; 槇山, 1930)。現在東京大学総合研究博物館で登録保管されている田端産*Pecten tokyoensis*は、Yokoyama(1927)の参照標本3点(第3図Cの標本ほか2点)しかなく、山川(1908a)の標本が散逸していると考えられる。

Watanabe(1916)、渡邊(1916)が報告した品川貝層(第1図)は「大正3年6月迄に本所(地質調査所)に於いて蒐集したる材料」で*Pecten tokyoensis*が含まれているが、産業技術総合研究所地質調査総合センターでは該当する標本群を確認できなかった。

氏家(1952)による大塚仲町貝層(第1図)の参照標本の所在は確認できていない。

4. おわりに

化石に限らず、あらゆる自然史標本は先人たちの知的活動の証しであり、自然観を養うための教育資源であり、さらに、新たな着想や手法をもって再び活用されるべき研究資源でもある(速水, 2009; 斎藤, 2013)。だれもが利用できるように標本は整理・公表され、さまざまな分野の研究や教育で活用されることを通して、新たな付加価値が生み出される。

今回の調査で、大学、博物館、資料館の貝化石コレクションのなかに東京都区部で採集されたトウキョウホタテ標本が含まれていることが分かった。我が国の地質学の黎明期以来の研究の参照標本、研究者が体系的に収集したコレクション、区民からの寄贈標本は関連機関の歴代スタッフの尽力によって守り継がれてきたと言ってよい。これらの機関に必ずしも貝化石の専門家が在職していたわけではないが、担当や専門の異同を問わず、標本や資料を残してきた関係者に敬意を表したい。開発前の東京都区部は身近なところで貝化石を採集できる環境だったようだが、現在、身近と呼べる露頭はほとんどない。以前はありふれた収集物であったものが、気付いたときには希少な標本となっている例は少なくない。

地質学に関わる職種に就いてでもない限り、人工の構築物に覆われた都市部で大多数の人々は地層や化石を自分

とは無縁のものと思って暮らしている。しかし、足元に地層や化石が存在することに気が付き、それらに“東京層”やトウキョウホタテといった「東京」に由来する名が付けられていることを知れば、地質や化石に対する興味関心の扉が開かれるだろう。家紋、洋菓子のマドレーヌの形、石油会社のロゴ、アクセサリー類のデザインに採用されるなど、歴史のなかで人々は“ほたて型”の特徴的な形に美的な価値を見出しもいる。さらに、トウキョウホタテは第四紀貝化石のなかで数少ない絶滅種の一つでもある。このように、トウキョウホタテは、その名前、美しい形、絶滅にまつわる神秘性といった人々を魅了する要素を兼ね備えている。まずは古生物の面白さや楽しさを伝える手段として、また、都市部における地質学の普及啓発活動の入り口として東京産トウキョウホタテには利用価値があるといえるだろう。

一方で、東京都区部産の貝化石は、“東京層”の層序・年代の解明や古東京湾の環境復元に貢献する可能性を秘めてもいる。東京都内各地の貝化石層には、トウキョウホタテを多産する貝層と、全く産出しないか稀にしか産出しない貝層がある(第1図)。また、後者にあたる成増貝層(菊地, 1980)や江戸川公園ハイガイ層(大炊御門, 1936)では近縁種のホタテガイ*Mizuhopecten yessoensis*の産出が報告されている。トウキョウホタテの産出の有無は貝化石層形成時の海況の違いを反映している可能性がある。東京都や区が公開するボーリング資料と貝化石層との照合、化石に付着した堆積物の分析、貝殻の化学的分析による古環境指標の抽出などを通して、“東京層”の実態解明に向けた研究資源としての活用も考えられる。

教育と学術の両面において、トウキョウホタテをはじめとする東京都区部産の貝化石を利活用した知的創造に期待する。

謝辞: 標本調査にあたり、芳賀拓真氏(国立科学博物館)、中村新之介氏(板橋区立郷土資料館)、中野守久氏(北区飛鳥山博物館)、粕谷 崇氏(白根記念渋谷区郷土博物館・文学館)、伊藤泰弘氏(九州大学総合研究博物館)、根本潤氏(東北大学総合学術博物館)からご支援と有益な情報を頂いた。以上の方々に御礼申し上げる。

文 献

Akiyama, M. (1962) Studies on the phylogeny of *Patinopecten* in Japan. *Science Reports of the Tokyo Kyoiku Daigaku, Section C*, **8**, 63–122.

- 天野和孝 (2002) 身近な示準化石の教材化にむけて—イタヤガイ科二枚貝化石—. 地学教育, 55, 175–182.
- Brauns, D. (1881) Geology of the environs of Tokio. *Memoirs of the Science Department, Tokio Daigaku*, no. 4, 1–82, pls. 1–8.
- 遠藤 毅・中山俊雄・川島眞一・笹岡弘治・川合将文・小川 好・實田 淳・岡本 順・大岡 浩・石村賢二 (1996) 東京都区部の大深度地下地盤. 平成 8 年度東京都土木技術研究所年報, 193–216.
- 福田 理・安藤保二 (1951) 東京都内の地質Ⅲ 徳丸貝層について. 自然科学と博物館, 18, 179–194.
- 速水 格 (2009) 古生物学. 東京大学出版会, 214p.
- 石浦章一・鎌田正裕ほか 54 名 (2015) わくわく理科 6. 啓林館, 210 p.
- 伊藤圭介 (1872) 日本産物誌 武蔵部上巻. 文部省, 63p.
- 寿円晋吾 (1966) 多摩川地域における武蔵野台地南部の地質 (2). 地学雑誌, 75, 266–281.
- 貝塚爽平 (1979) 東京の自然史 増補第二版. 紀伊国屋書店, 239p.
- 川辺文久 (2018) 東京都内の郷土館における更新世貝化石の展示. GSJ 地質ニュース, 7, 65–66.
- 川辺文久・芳賀拓真 (2018) 板橋区産の第四紀更新世貝化石. 中村新之介編, 平成 29 年度特別展「水のゆくえ」図録, 板橋区立郷土資料館, 88–96.
- 菊地隆男 (1980) 成増貝層の貝化石群集について. 板橋区教育委員会編, 成増露頭地質調査報告書, 板橋区, 79–90, pls. V1–V7.
- 北区史編纂調査会 (1996) 北区史 通史編原始古代. 北区, 280p.
- 槇山次郎 (1930) 関東南部の洪積層. 小川博士還暦祝賀記念地学論叢, 弘文堂, 307–382.
- Masuda, K. (1962) Tertiary Pectinidae of Japan. *Science Reports of the Tohoku University, 2nd Series*, 33, 117–238.
- 森本雅樹・黒田武彦・天野一男ほか 10 名 (2017) 地学基礎改訂版. 実教出版, 207p.
- 守屋和佳 (2017) 東京の開発とともに歩んだ化石—東京都のトウキョウホタテ—. 化石, no. 102, 1–2.
- 中島 礼・木村克己・宮地良典・石原与四郎・田辺 晋 (2004) 東京都江戸川区小松川と埼玉県草加市柿木において掘削した沖積層ボーリングコアから産出した貝化石群集. 地質調査研究報告, 55, 237–269.
- 中島 礼・加瀬友喜・知野光雄・中尾賢一・栗原行人 (2016) 完新統産トウキョウホタテの年代再検討. 日本古生物学会第 165 回例会予稿集, 39.
- 中島 礼・納谷友規・野々垣 進 (2017) 産技連地質地盤情報分科会平成 28 年度講演会「都市平野部の地質学」の開催報告. GSJ 地質ニュース, 6, 136–139.
- 中島 礼・加瀬友喜・川辺文久 (2018) ブラウンスが報告した東京の露頭. GSJ 地質ニュース, 7, 63–64.
- 大炊御門経輝 (1936) 東京市江戸川公園の貝化石層. 地球, 26, 334–340.
- 大塚彌之助 (1931) 第四紀. 岩波書店, 107p.
- 大塚彌之助 (1932) 東京市麴町区五番町英國大使館前青葉通地下 15 米に於ける貝層. 貝類学雑誌ヱキナス, 3, 109–112.
- 大塚彌之助 (1936) 東京市豊島区巢鴨新庚申塚地下の貝層. 地質学雑誌, 43, 707–708.
- 大塚彌之助 (1948) 日本島の生ひ立ち. 大八洲出版, 133p.
- 尾崎 博・福田 理・安藤保二 (1951) 東京都内の地質Ⅱ 東京層に発見された *Tellina venulosa* Schrenck 及び *Spisula sachalinensis* (Schrenck). 自然科学と博物館, 18, 146–152.
- 尾崎 博・福田 理・安藤保二 (1957) 東京都内の地質Ⅶ 板橋区徳丸貝層図譜. 国立科学博物館研究報告, 3, 162–175, pls. 28–33.
- 斎藤靖二 (2013) 自然史標本の意義について. 化石, no. 93, 131–135.
- 佐々木猛智・伊藤泰弘 (2012) 東大古生物学 化石からみる生命史. 東京大学出版会, 390p.
- 霜田光一ほか 25 名 (2012) 中学校科学 1. 学校図書, 239p.
- 杉原重夫 (2008) 武蔵野台地. 日本地質学会編, 日本地方地質誌 3 関東地方, 朝倉書店, 331–336.
- 清家一馬・川辺文久・栗原憲一・守屋和佳・和仁良二 (2015) 故平野弘道教授の業績概要および平野研究室化石コレクションの移管について. 早稲田大学 教育・総合科学学術院 学術研究 (自然科学編), no. 63, 13–30.
- Tokunaga, S. (1906) Fossils from the environs of Tokyo. *Journal of the College of Science, Imperial University of Tokyo*, 21, 1–96, pls. 1–6.
- 徳永重康 (1933) 東京にて發掘した象化石. 地学雑誌, 45, 419–426, pls. 5–6.
- 氏家 宏 (1952) 東京都内の地質Ⅴ 大塚仲町貝層について. 自然科学と博物館, 19, 206–216.
- Watanabe, K. (1916) Geological note on the Shinagawa Cutting, Tokyo. *Journal of the Geological Society of Japan*, 23, 139–143.
- 渡邊久吉 (1916) 品川八ッ山鐵橋附近地質. 地学雑誌,

- 28, 471-475.
- Yabe, H. (1911) A new Pleistocene fauna from Tokyo, with a general statement on the Pleistocene deposits of Tokyo, Japan. *Geological Magazine*, **8**, 210-217.
- 矢部長克 (1922) 日本洪積世氣候論. 東北帝国大学理学部地質学古生物学教室研究邦文報告, no. 3, 1-38.
- 山川戈登 (1908a) 田端産化石. 地質学雑誌, **15**, 84-87.
- 山川戈登 (1908b) 車町産化石. 地質学雑誌, **15**, 181-192.
- Yokoyama, M. (1927) Mollusca from the Upper Musashino of Tokyo and its suburbs. *Journal of the Faculty of Science, Imperial University of Tokyo, Section 2, Geology, Mineralogy, Geography, Seismology*, **1**, 391-437, pls. 46-50.
-
- KAWABE Fumihisa, NAKASHIMA Rei, KASE Tomoki, TAGUCHI Kiminori, SASAKI Takenori and MORIYA Kazuyoshi (2018) Records of occurrence and repository of *Mizuhopecten tokyoensis* (Tokunaga) from Tokyo metropolitan area.
-

(受付:2017年12月26日)

J.J. ライン著「中山道旅行記」邦訳（その3） —美濃を横切る—

山田直利¹⁾・矢島道子²⁾

【訳者まえがき】

本邦訳は J. J. Rein (1880) の「中山道旅行記」(独文) を全訳し、それを(その1)～(その7)の7篇に分けて掲載するものである。原論文は「章・節」のほかには見出し語がなく、段落間の文章も長いので、邦訳では新たに見出し語を設け、またなるべく短く段落を入れた。原論文の脚注は、邦訳では原注として各章・節の末尾にまとめて配置した。訳者による注は訳文中の括弧〔 〕内に記入したほか、別に訳注を設けて原注の次に配置した。さらに原論文・原注・訳注に引用された文献のリストを章・節ごとに載せた。

2. J.J. ライン著「中山道旅行記—著者自身の観察と研究に基づき, E. クニッピング氏の路線測量に従い, その覚書を利用した—」全訳(つづき)

2.3 美濃を横切る(原論文のII章)

<関ヶ原>(第5図)

中山道はここ美濃ではすべて木曾川〔長良川・揖斐川を含む〕の流域内にあり、西の国境山地から、肥沃な水の大地、美濃・尾張平野〔濃尾平野〕を横切り、次いでそれまでとは違う丘陵地帯を経て、美しいけれど山勝ちの信濃国へ上って行く。近江から美濃への国境越え〔今須峠〕は柏原から1里の今須〔原文では Inasu〕の近くにある。

中山道は起伏に富む丘陵地帯を越えて隣接した平野へ下り、今須から1里で歴史上重要な関ヶ原宿に着く。ここで1600年10月に日本史上最も残酷でかつ最も重大な結果をもたらした合戦が行われた。徳川家康はこの地で敵の合同軍〔西軍〕を打ち破り、それからは順次屈服させることができた。しかし、関ヶ原合戦のもたらした結果はおもに以下の諸点であった。

- (1) 徳川將軍家の創設。それは権力および国運に対する帝の影響をなくし、それ以後250年以上にわたって江戸から国を専制的に支配した。

- (2) 数百年にわたる破壊的内戦の後の、同じように長い平和の時代の始まり。
- (3) 封建制度の完成。それはすでに12世紀末に源頼朝が基礎を作り、いまやきわめて独特の形式を持つに至った。
- (4) キリスト教の根絶。キリスト教は16世紀の中ごろからポルトガルの宣教師によって貧しく無権利の民に救済の福音として苦難のうちに宣教され、やがて深く根付いたものであった。
- (5) 鎖国ならびに外国人の往来を長崎に、かつオランダ人と中国人に制限したこと。そこでは彼らは決して名誉ある、またうらやむべき役割を果たしたのではなかった。



第5図 中山道路線図2。(関ヶ原—加納)

Rein (1880) の付図1「25万分の1中山道旅行路線図—大津から加納まで—」の北東部分を基図とし、それを約2分の1に縮小し、その上に中山道六十九次の宿駅(黒四角)名をやや大きな字で、また本論文で引用されたその他の地名をやや小さな字で和名表記した。

1) 地質調査所(現産業技術総合研究所 地質調査総合センター)元所員

2) 日本大学文理学部

キーワード: ライン, クニッピング, 中村新太郎, 中山道, 地形, 地質, 植物, 美濃, 関ヶ原, 金生山, 馬籠峠

尾張出身の老獺で野心的な農家の息子であった秀吉(太閤様)は、特異な軍事的、行政的資質によって最高権力の地位に登り詰め、日本の無政府状態に終止符を打ち、さらに彼の無敵の軍隊を朝鮮と中国への侵略のために派遣した。それにもかかわらず、彼は1598年の死に際して6歳の息子秀頼を決して確実とはいえない跡取りとした。秀吉に関東八州(江戸平野およびその近辺)の支配を任せられ、江戸を定住地とした家康、日本の歴史の中で最も卓越した人物は、未成年の〔秀吉〕子とその相談役たちに彼〔家康〕の権力と影響力を分かち与えようとはせず、むしろ彼自身が最高の権力を得ようと努力した。秀頼および太閤様が彼に付けた5人の大守たち—その中では石田三成が中心人物であった—の周りに、秀吉の死を前にしてなお新たな忠誠を誓った秀吉の全家臣と他のすべての大名たちが集まった。大名たちにとっては、長州の毛利や薩摩の島津の両大家のように、徳川家の増大する力がその国境内に止まることが大切であった。とくに秀頼の力をもって彼らの力も広げられると信じたキリスト教徒もまた同様であった。しかし、数においてはるかに優る軍勢および多くの著名な武将たち—その中では特に朝鮮における勝利者であったキリスト教徒小西(行長)(イエズス会員ドン・オースティン)がこちら側〔三成方〕に加担した—は、指揮系統においても目的追求においても統一に欠けていた。集合地点は大阪であった。〔三成方の〕合同軍はここから伏見を経て中山道へ、そしてそれに沿って美濃の大垣まで進み、そこで彼らは堅い陣地を敷いた。

その間に、家康に従う者たちは隣の尾張に5万人が集結した。徳川は同じくらいの大軍勢を江戸に集めていた。家康はその半分の軍勢と共に東海道に沿って進み、尾張で彼の部下たちと合流し、残りの2万5千人の軍勢は彼の息子の秀忠が中山道に沿って率いて行くことになった。家康は美濃の首府、岐阜の占領をもって彼の作戦を始めた。これに対して敵は大垣を放棄して、関ヶ原に向かって引き返し、そこで13万人の軍勢を中山道に面して、そして3里離れた伊吹山の支脈を背にして戦列を敷いた。一方、家康は7万5千人の軍勢をもって追撃した。激しい戦いは決着しないまま長い時間続いたが、最終的に指揮系統の統一性、迅速さ、そして慎重さによって徳川方が勝利を収めた。彼の息子〔秀忠〕は到着が遅れ、京都・大阪方面に向かって敵の追撃に加わることはできなかった。日本人の話によると、石田、小西、大谷のような傑出したキリスト教徒武将は京都で不名誉に殺されたが、そのときに彼らは自刃することを拒み、敵によって公然と処刑された^{*1}。他の大多数の者に対しては、家康は寛大、穏便に対処した。

関ヶ原から5分位の道を行くと、中山道の左側に松並木があり、相川峠の麓の古い土塚に向かう。塚の上の敷石および苔に被われた囲いは、家康が合戦の間命令を発した場所であることを示している。しかし、村の京都側には別の土塚があって、その頂にある記念碑から、ここに首塚があることを思い起こさせる。その場所は軍の神、八幡を祀った社の近くにある。打ち殺された敵の首が埋葬されたこのような土塚は多分周りにもっと多く存在する。なぜなら、敗走中に死んだはるかに多数の兵を除いても、上記の合戦において敗北した軍勢のおおよそ1万名の兵がその命を失ったに違いないからである。

<垂井・赤坂>

関ヶ原から1里半行ったところが垂井宿^{たるい}であり、そこには女神、金山彦神^{かなやまひこのかみ}(児玉, 1986; 原文ではKumigama Shiki Daijin)を祀った有名な神社〔南宮大社〕がある。その場所を過ぎた後に中山道から右へ立派な道〔美濃路〕が分岐し、その道はすでに述べた城下町大垣、すなわち大名戸田采女正〔氏共〕^{うねめのかみ}の元の居城を過ぎて南東方向へ、尾張の大首府である名古屋に、従って東海道に通じている。垂井はすでにきわめて肥沃な美濃平野の中にあるが、中山道の左側にはなお森に被われた高地が、1里と3分の1里離れた次の宿、赤坂までなお連なっている。それは、北方に見えている、美濃の北西および西を限る長い山脈の一部である梅山^{*2}の支脈である。その支脈の最突出部である金生山^{きんしょうざん}—赤坂北方の丘陵で、中山道からわずか12町しか離れていない—は、ここで採掘される色とりどりの大理石によって我々の特別な興味を引く。

〔金生山には〕黒色、赤褐色、灰色、しばしば白色縞状または全く白色の石灰岩が産出し、それらは、拳大およびそれより大きな球体、卵形、蓋の付いた杯および瓶形の小壺、小箱、硯などの、あらゆる小物に大量に加工され、旅行者へ売り出されている。(ここで同様に売られている美しい紅玉龍^{こうぎょくずい}の玉は北陸道、特に加賀から産出するものである)。石は美しく磨かれ、その中に注目すべき化石、すなわち、ウミユリの茎やフズリナが見いだされるので、我々にとって一層の興味がある。特に灰色の石灰岩はフズリナによってびっしりと満たされている。その磨かれた表面には、暗色の基質中に灰白色の小舟の形、楕円形および環状の縦断面および横断面〔を示すフズリナ〕が密にちりばめられており、よく観察すれば肉眼でも房壁によって作られた対称的な小房構造を認めることができる。このフズリナは周知のように有孔虫類に属し、ここでは、ロシアおよび北アメリカにおけると同様に石炭紀層^{1)*3}を示すと考えら

れる。

赤坂を登って後は全く低地の中である。なぜなら、ここでは山地は左側にもずっと遠のいて、更地山³⁴や文珠山³⁵は北方に見える美濃・越前国境山地の最も外側の前衛と見なされるからである。多くの水量豊かな木曾川支流はこの山地に源を発し、街道は橋あるいは小舟によってそれらを渡る。それらは、周りに広がる田畑と多数の村落を洪水から守るために、高い堤によって縁取られている。このよく耕作された地方の光景は、農業に対して感受性と理解を持つすべての人にとって、いずれの季節でも快くかつ教訓的である。春に訪れるならば、深い畔の間に列をなして植えられた冬の作物：アブラナ、オオムギ、コムギおよびその他の豊かな、雑草に強い収穫物を見ることができる。一方、夏の盛りには、今では沼地に変えられた地面を被う若いイネの美しい緑を見て喜ぶ。しかし、秋には重く垂れた黄金色のイネの穂を眺めるが、その一つ一つはすべて夏の暑さや労働の証明なのである²⁾。美濃産の米は全国で最高の価値があり、それで徳川将軍もこの優れた食料品を自らの必需品としてここから取り寄せた。

<美江寺・河渡・加納>

赤坂の先には美江寺³⁶(原文では Meiji)、河渡³⁷および加納の各宿駅が続く。美江寺では木曾川の最初の重要な支流を渡り、加納では2番目の支流を渡る。前者は呂久川³⁸[揖斐川]と呼ばれ、後者は郡上川³⁹[長良川]、ずっと下流では加納川とも呼ばれている。その間に街道はより小さい犀川と糸貫川[いずれも長良川の支流]をも越える。美濃国のこれらすべての河川、なかでも最初に挙げた2つの川では、ときに訓練されたウ(鶉)を使った漁労が行われているのを見ることができる。ウは中国におけるよりも使用されることはずっと少ないが、それは、非常に綺麗好きな日本人が不潔で臭い鳥と本当に親しくなることはできないので、分かりきったことである。

我々が小舟で渡った長良川(河渡川とも呼ばれる)の向かい側では、養蚕業が通常の農業と並ぶ重要な仕事として行われており、それはこれから先の街道の多くの区間でも同様であるが、一方、東海道ではそれはほとんど見られない。冬の作物が収穫され、米、綿およびその他の夏の作物が順次植え替えられ、そして農作業がいくらか休みになった後の夏の盛りに、鏡島村⁴⁰、クモミ村⁴¹などの村々を通過してここに来るならば、いたるところで小さな織機や糸車が動いているのが見られるだろう。日本のこの地方の住民は勤勉さと温かい友情の気質を特徴としており、人々の仕事に深い関心を抱く外国人はいたるところで歓迎される。特

に興味があるのは昔の城下町加納の織物業である。なぜなら、ここでは主に高級な紋縮緬⁴²が織られており、その際、一部では山繭⁴³の光沢ある絹糸も使われているからである。

加納は大名永井侯(3万2千石)の領地であったが、その小さな城は痕跡さえも残っていない[1872年廃城]。1868-69年の王政復古は、国内の他の多くの箇所と同じように、ここでも「角を矯めて牛を殺し」、美術や骨董品の愛好家が興味をもって見たであろう多くの物を破壊した。

<岐阜>

加納の1里北方には岐阜がある。岐阜は美濃国の首府、岐阜県の首府であり、飛騨国も岐阜県に属している。岐阜は人口1万人で、街道が加納を越えて通じている先の名古屋からは9里離れている。

付図[第5図]には岐阜は示されていないが、その北東側に険しく聳え森に被われた金華山⁴⁴[標高329m]は図示されており、その頂上に織田信長が城を建てた。またそこからは2つの低くて同じように灌木林で覆われた丘、すなわち伊奈波山⁴⁵[標高136m]と相場山⁴⁶[標高206mの洞山か?]が中山道に向かって前に張り出している[山名は小井土由光氏のご教示による]。晴れた天気のあるときにはこれらの山頂から城下町名古屋と東海道の桑名を望むことができる。相場山はその名前を「相場の山」(Preisberg)から取っている。なぜなら、昔岐阜の商人たちはここに一種の光通信を創設し、旗を使って名古屋や桑名の商売仲間に米価を知らせたからである。

名古屋から加納を越えて岐阜へ至る街道[岐阜街道]は郡上川の谷を通過して北方へ続いており、有名な紙の産地牧谷⁴⁷[長良川支流の板取川下流部]を左に見て八幡⁴⁸[現郡上市八幡町]へ通じている。八幡は大名青山侯(4万8千石)の元の居住地であり、彼は、わがドイツ国の中世の野武士に似て、鬱蒼たる山、本物の青山(青い山)の上に高く彼の城を建てた⁴⁹。絹織物を産する八幡から街道はさらに油坂峠⁵⁰を越えて越前へ、そして日本海に通じている。

<鶉沼一太田> (第6図)

加納の次は、4里半離れた鶉沼宿⁵¹である。中山道は小さな境川(すなわち境の川)を越えて続き、新加納で肥沃な平野を後にし、砂質の原⁵²[各務原台地]を越え、疎らな松林を過ぎ、徐々に美濃東部の丘陵地帯に向かって上って行く。鶉沼に着く1時間前には、右手、木曾川の対岸に、従って確かに尾張の国に、犬山の円錐丘⁵³が見える。犬山の

麓には同じ名前の街と大名成瀬の城〔犬山城〕がある。

鵜沼を後にすると道は急に約 60 m も上がり、鵜沼峠〔現うとう峠〕に着く。鵜沼峠では、大津からここまでの道を忠実に示してくれたありがたい伊吹山が最後の別れの会釈を送ってくれる。養魚池を右手にして、その側を通り過ぎると、道はふたたび峡谷のような谷を通過して、泡立ち怒号する木曾川の川岸に向かって下って行く。それから我々は木曾川の右岸に沿って太田宿まで行く。この道路区間は中山道全体のうち最悪の部分である。

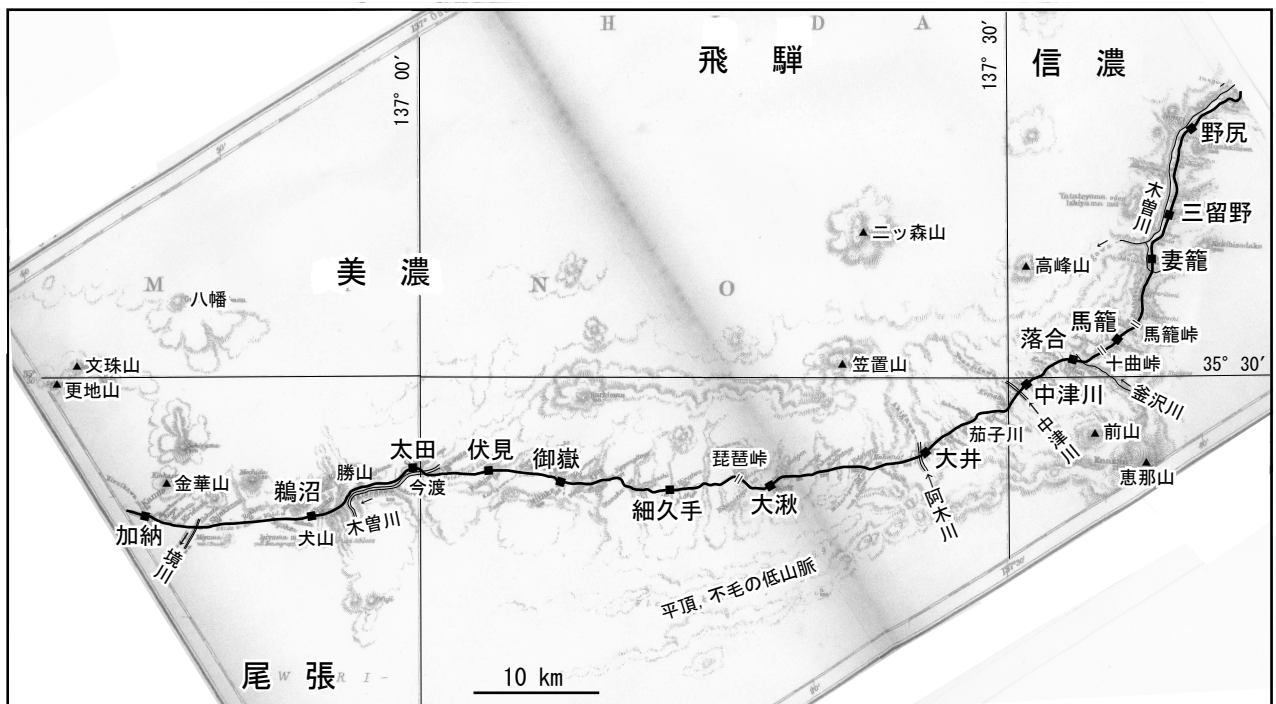
<太田—馬籠>

太田の 2, 3 里北方には刀鍛冶師たち（兼元および兼光）によって古い時代から有名な町、関がある。太田を過ぎて小舟で木曾川を渡ると、今渡という所に着く。木曾川はここでは 50 m もの幅があり、それはここから半時間ほど上流に行ったところで飛騨川が合流して水量を増していたためである。中山道は、今渡で木曾川の左岸に移って後は、木曾川からあまり離れることなく、伏見、御嶽〔明治以降は御嵩〕、細久手、大湫〔大久手とも記す〕、大井、中津川、落合、馬籠の各宿駅を過ぎて、標高 797 m の馬籠峠^{*10} に向かう。馬籠峠は、美濃と信濃の古い政治的な国境ではないけれども、自然の境界である；中山道は〔自然の境

界である〕馬籠峠を越えるよりも 2 時間も早く、落合と馬籠の間〔十曲峠^{じゆつきよくとうげ}〕で国境を越える。

木曾川は、この全部で距離 10 マイル〔1 ドイツ・マイルは 7,420 m〕の区間、全体として西から東へ向かう〔中山道の〕区間の左側のかかなり離れたところを流れているので、その河床をまれにしか見ることはできない。今渡と大井の間で、琵琶峠^{*11} の標高 543 m まで、そして次の大湫宿近くの標高 541 m まで徐々に上って行くのは波状で平らな山背を持つ丘陵地帯であり、それからは大井に向かって木曾川の左岸支流である阿木川の河床へ標高 290 m まで下り、そして美濃国境の標高 540 m の荒町^{あらまち}でふたたびゆっくりと上り、標高 611 m の馬籠に至る。この地方の単調で殺風景な性質はきわめてまれに豊饒な谷凹地によって中断されるが、それは嬉しいことである。

東海道の国々、すなわち伊勢、尾張、三河および遠江の境界に、そして他方では近江と美濃に広がる丘陵には共通の特徴がある。標高 100 m ~ 500 m の平頂高地は多くは裸地でローム質の部分を示すか、あるいは砂およびチャート礫で被われ^{*12}、概して殺風景で不毛である。ここには美しい森も密集した緑の衣も全く見られない。低く散在する叢林、その中でも、ネズ、シオデおよびワラビは、あちこちにある不格好なマツの疎林と同様に、土地の不毛性を



第 6 図 中山道路線図 3. (加納—馬籠峠)

Rein (1880) の付図 II 「25 万分の 1 中山道旅行路線図—加納から下諏訪まで—」の西半部を基図とし、それを約 2 分の 1 に縮小し、その上に中山道六十九次の宿駅（黒四角）名をやや大きな字で、また本論文で引用されたその他の地名・説明文をやや小さな字で和名表記した。

十分に示している。

多くの地点、とくに細久手宿南方の月吉〔現瑞浪市明世町月吉〕で、我々は第三紀の植物印象化石および海生貝類化石を発見し、別のところでは黒ずんだ色のひどく風化した花崗岩、とくに我々が文象花崗岩^{*13}と命名した種類の大岩塊が露出するのを認めた。我々はふたたび、美濃と尾張の国境の勝山^{*14}におけると同様に、古い無化石粘板岩〔美濃帯のジュラ紀コンプレックス〕に出会う。この地方における豊富な粘土層〔鮮新統瀬戸層群〕は、美濃・尾張・三河3国の境界における文象花崗岩の風化長石と同様に、広域的な製陶業の基となっている。製陶業は美濃の南東部およびそれに接する尾張の多くの場所に広がっており、数千人の人々がそれに従事している。しかし、中山道で製陶業が行われているのは1か所、すなわち大井宿と中津川宿の間の茄子川のみであって、ここでは通常陶磁器や陶土製の食器が製造されている。

中津川〔原文ではNakasugawa〕は中津川^{*15}の右岸〔原文では左岸〕の肥沃な小平野に位置している。南からあるいは北から来た人々が近くの高みの1つに登り、そしてそこから街道と共に下ったとしたなら、この小平野および中山道に沿って長く伸びた快い小都会の眺めは驚くべき、かつ元気を与えるものである。この美しいオアシスでは、農作と並んで養蚕も熱心に営まれている。

「落合で風景は変わり、落合の上流でほとんど垂直な高い壁をもつ狭い谷からほとぼり出る釜沢川〔落合川〕の対岸では、あちこちの険しい斜面が現れ、長らく待ち焦がれた木曾川上流の山岳地帯にまもなく到達するだろうということを感じさせる。人々は上記の荒れ川を渡り、馬籠まで上る谷の南側を登る。荒町の手前では寂しい茶店の傍にある国境標が美濃と信濃の境界を表示している；なぜ国境がここにあって、峠（馬籠峠）にないのかは、奇妙なことであり、それは歴史上の根拠によって初めてよく説明される」（クニッピング）。

原注

¹⁾ この記事が日本に住んでいる1, 2人の外国人地質家の目にも止まるだろうという期待をもって、私はさらに、同じ地層を私が京都および山城平野の北方の鞍馬山でも発見したことを付け加えたい。鞍馬の小村は京都の3里北方の森で被われた山間部にあり、ここで山城平野は終わっている。鞍馬は北方の高まりにある毘沙門様、すなわち力技と剣術の神の寺によって、また同じく、有名な英雄であり、若い頃ここに住み、夜一人で徘徊していたときに山の悪魔、天狗様に会い、彼に剣術を教わった源義経によって、よく知られている。いまでもこの寺では義経の剣あるいは大刀を見ることができ、同じように、峠道の背比べ石の近くの森の中で高く伸びた、垣をめぐらした古いスギ、大杉を見ることができる。このスギは胸の高さで周囲6.15 mもあり、山の妖怪に初めて出会ったところと言われている。常緑樹

のカシワ、ツバキ、ヒメシャクナゲの藪およびモミの疎林のいたるところに灰色石灰岩の大岩塊が分布しており、そこからはウミユリの茎が部分的に飛び出している。ここに産出する石灰岩と赤坂のそれとが琵琶湖の北部および東部の山々を通して繋がっているということは、ありえないことではないように思われる。

²⁾ 心学道話^{*16}〔原文ではShinga Kudowa〕、巻のII、第2部ではこう書かれている：「民草の夏のかせぎのほどほどの穂にあらはれてみる秋の田」。それは英語では次のように意識されている。「見よ！ 多くの秋の平野ではすべての穂が夏の苦勞のすべてを無言で示している。」

訳注

- *1 ここに挙げられた3名の武将のうち、石田はキリスト教徒ではない。また大谷は京都で処刑されたのではなく、関ヶ原の戦場で自刃している。
- *2 垂井宿北方の池田山（標高924 m）を指す（中村, 1931, p.287）
- *3 赤坂石灰岩が石炭系とされたのは、Gümbel (1874)がウィーン万国博覧会に出品された日本産フズリナ石灰岩の標本（おそらく赤坂産）のフズリナを鑑定して、これを石炭紀の化石としたことによる。その後の研究により、赤坂石灰岩を含めて、日本のフズリナ石灰岩はほとんどが二疊紀のものと考えられるようになった（加藤, 1993）。
- *4 美江寺宿北方の石山（標高392 m）を指す（中村, 1931, p.288）。
- *5 鏡島村は河渡と加納の間の小村。クモミ村の所在は不明である（中村, 1931, p.289）。
- *6 縮緬地に文様を画き出したもの。岐阜、京都、福井などで生産される。
- *7 クヌギ、コナラなど、クワ以外の野生植物を食して生育するガの作る繭。天蚕ともいう。
- *8 八幡城は戦国時代に遠藤盛数により築かれ、その後、稲葉・遠藤・井上・金森・青山と領主が交代するたびに改修を重ねられたが、明治初年に城の建物は破却された。現在の八幡城は1933年に再建されたもの（南條・奈良本, 1989）。
- *9 犬山は美濃帯コンプレックスのチャートからなる小山で、円錐形火山ではない（吉田・脇田, 1999）。
- *10 原文ではMissakatôge。この峠は江戸時代には妻籠峠、馬籠峠、木曾の御坂などと呼ばれていたが、ラインが旅行した頃には専ら馬籠峠と呼ばれるようになっていた。ラインは古称「木曾の御坂」からMissakatôgeと呼んだのであろう。なお、中村（1931, p.291）はこれに「神坂峠」の字を当てているが、神坂峠は岐阜県中津川市と長野県阿智村との間にある標高1,595 mの峠であり、古代東山道の交通の要所であったが、後に中山道が神坂峠を避けて木曾谷を通るようになったため、神坂峠は廃れた（この項、荻野義雄氏のご教示による）。本邦訳では原文のMissakatôgeはすべて馬籠峠として表記する。
- *11 原文ではHibarutôgeとなっている（中村, 1931, p.291）。
- *12 ローム質の部分は風化火山灰層（更新統）、砂およびチャート礫のあるのは土岐砂礫層（鮮新統）の露出する地帯であろう。
- *13 長石（ふつうカリ長石）と石英との文象連晶を特徴とする花崗岩。前者の結晶中に後者の多数の楔形文字状の結晶が連晶する。
- *14 原文ではKachigawaとなっているが、勝山〔現加茂郡祝町勝山〕の間違ひである（中村, 1931, p.291）。犬山・勝山間の木曾川の両岸には美濃帯コンプレックス（チャート・泥岩・砂岩）が連続的に露出し、この露頭の観察に基づいて層序・テクトニクスの詳細な研究が行われている（小嶋, 2006）。この区間の木曾川はドイツのライン渓谷に似ていることから、「日本ライン」（志賀, 1894）とも呼ばれている。
- *15 ラインは中津川のことを間違ってYamagigawa（Weidenflusse,

直訳すれば柳川)と書いている。中津川は江戸期、川上川あるいは中津川と呼ばれたが、明治以降は専ら中津川と呼ばれている。「柳川」と呼ばれたことはない(荻野義雄氏のご教示による)。

*16 江戸時代、神、儒、仏の3教を融合して、その教えを平易な言葉と通俗なたとえで説いた庶民教育。石田梅岩(1685-1744)が始めた。

謝辞：岐阜大学教育学部名誉教授の小井土由光氏からは岐阜市内の山の旧名について示唆を頂いた。元中津川市鉱物博物館館長の荻野義雄氏からは、馬籠峠や十曲峠の名称の由来を詳しくご教示頂いた。両氏に深くお礼申し上げる。

文 献

- Gümbel, C. W. (1874) *Japanische Gesteine. Das Ausland*, 23, 479-480.
- 加藤 誠 (1993) 1940年代前半までの日本の古生層研究史。日本地質学会編「日本の地質学100年」, 33-38.
- 児玉幸多 (1986) 中山道を歩く。中央公論社, 東京, 434p.
- 小嶋 智 (2006) 犬山地域のチャート・碎屑岩シーケンス。日本地質学会編, 日本地方地質誌, 4, 「中部地方」, 朝倉書店, 東京, 216-219.

南條範夫・奈良本辰也監修 (1989) 日本の名城・古城事典。TBSブリタニカ, 東京, 508p.

志賀重昂 (1894) 日本風景論。政教社, 東京, 219p.

中村新太郎 (1931) 新訳日本地学論文集 (16)~(17), ライン—中山道誌 (2~3)。地球, 16, 188-199, 279-292.

Rein, J. J. (1880) *Der Nakasendô in Japan, nach eigenen Beobachtungen und Studien im Anschluss an die Itinerar-Aufnahme von E. Knipping und mit Benutzung von dessen Notizen. Petermann's Mittheilungen, Ergänzungsheft*, No. 59, S. 38.

吉田史郎・脇田浩二 (1999) 岐阜地域の地質。地域地質研究報告 (5万分の1地質図幅), 地質調査所, 71p.

YAMADA Naotoshi and YAJIMA Michiko (2018) Japanese translation of "Der Nakasendô in Japan" (Rein, 1880), Part 3—Crossing Mino—.

(受付: 2017年7月19日)

三つの石で地球が分かる —岩石がひもとくこの星のなりたち—

藤岡換太郎 [著]

講談社 (ブルーバックス)
発売日: 2017年5月17日
定価: 920円+税
ISBN: 978-4-065020159
A5版 (17.2 x 11.2 x 1.2 cm) 並製
224ページ

藤岡換太郎氏は JAMSTEC 在籍時に「しんかい 6500」に 51 回乗船し、太平洋、大西洋、インド洋の三大洋初潜航を達成した深海研究の大家であることはよく知られている。最近では、過去の研究経験に裏付けされた書籍の執筆も活発に行っておられ、これまでもブルーバックスシリーズの一般普及向けの新書として出版された、『山はどうしてできるのか』、『海はどうしてできたのか』、『川はどうしてできるのか』の 3 部作についても本誌でも紹介してきた経緯がある。

さて、前作から 3 年もあけずに発表された今回の新書のテーマは、なんと“石”である。“石”は我々の生活に満ちあふれており、一般人にとっては身近な存在ではある。例えば、“石の上にも 3 年”、“焼け石に水”、“石橋を叩いて渡る”のような日常の諺にもしばしば現れているその一方で、“石ころ”とも呼ばれ、蔑まれてもいる。ちなみに、一般人の認識している“石”とは、我々地質学者のいう“岩石”に相当し、さらに付け加えると、地質学者のいう“石”とは岩石の構成要素である“(造岩)鉱物”に相当するので、やや混乱してしまう。

私の子供は現在つくば市内の高校に通っているが、彼女が過去に習っていた中学理科の教科書にも 6 つの“石”が出現する。それらは、読者もよく知っている花崗岩、閃緑岩、斑れい岩等の深成岩、および流紋岩、安山岩、玄武岩等の火山岩である。これを「シンカ(ン)センハカリアゲと覚えるのだ!」と彼女に教えられた。このうち花崗岩と斑れい岩は、つくば市近郊の筑波山にも露出するから比較的身近で分かりやすいが、その他の“石”は茨城県内で実物を



見ることは難しい。おそらくこれを教える側のつくば市内の中学や高校の理科教員もそれほど“石”に詳しいとは私には想像しがたい。

さて、今回の藤岡氏の新書の教えでは、地球の歴史を考える上で 3 つの“石”について知っていれば十分とのことである。3 つの“石”とは、緑色のマントル起源の△△岩、黒色の海洋地殻起源の□□岩、そして我々の居住する陸地を構成する白い○○岩なのである。詳しい話はここではネタバレにもなるので控えるが、私には、この論理が実にシンプルかつ明解に思える。本書では、この 3 つの“石”を基軸として、その他の岩石や造岩鉱物(珪酸塩鉱物)について、さらに地球史についても分かりやすく解説されている。

私見として、この新書は地質のプロというよりは、これまで“石”に馴染みの無い人、特に高校生の皆さんにこそ読んで頂くことをお勧めしたい。本文中には藤岡氏好みの多少マニアックな専門用語が頻発するし、第 6 章の地球の進化の記述は専門過ぎて少し理解しがたいかとも思われるが、授業で「地球の構造」、「火山活動と火成岩」の単元を学ぶ前にこの本の第 5 章までを一読しておくこと、より理解度が増すことであろう。たとえばカレー鍋に例えたボーエンの結晶分化作用の説明は、実に見事である。但し、“石”や“石”の薄片写真は全て白黒であることは新書の性格として仕方が無いことかも知れないが、もしカラーで示されていたら、さらに読者を魅了する書となっていたかもしれない。

(産総研 地質調査総合センター 地質情報研究部門 七山 太)

GSJ 地質ニュース編集委員会

委員長 岡井貴司
副委員長 中島礼
委員 井川怜欧
児玉信介
竹田幹郎
山崎誠子
小松原純子
伏島祐一郎
森尻理恵

事務局

国立研究開発法人 産業技術総合研究所
地質調査総合センター
地質情報基盤センター 出版室
E-mail : g-news-ml@aist.go.jp

GSJ 地質ニュース 第7巻第3号
平成30年3月15日 発行

国立研究開発法人 産業技術総合研究所
地質調査総合センター

〒305-8567 茨城県つくば市東1-1-1 中央第7

印刷所

GSJ Chishitsu News Editorial Board

Chief Editor : Takashi Okai
Deputy Chief Editor : Rei Nakashima
Editors : Reo Ikawa
Shinsuke Kodama
Mikio Takeda
Seiko Yamasaki
Junko Komatsubara
Yuichiro Fusejima
Rie Morijiri

Secretariat Office

National Institute of Advanced Industrial Science and Technology
Geological Survey of Japan
Geoinformation Service Center Publication Office
E-mail : g-news-ml@aist.go.jp

GSJ Chishitsu News Vol. 7 No. 3
March 15, 2018

Geological Survey of Japan, AIST

AIST Tsukuba Central 7, 1-1-1, Higashi, Tsukuba,
Ibaraki 305-8567, Japan

大観覧車くるりんから見た勝山に立地する松山城

[cover photo](#)



いよてつ高島屋 9F に設置された大観覧車くるりんは、標高106.2 m まで到達し、ここからは松山市街地が展望できる。一方、ここから 1 km ほど北方には、お盆を伏せたような形をした小高い丘陵地である勝山があり、その山頂には慶長七年(1602年)に建てられた松山城本丸が立地する。勝山一帯は、領家帯の花崗岩と上部白亜系和泉層群からなり、後者が前者を不整合に覆う露頭が松山城周辺でも観察できる。

(写真・文：地質調査総合センター地質情報研究部門 七山 太)

The Matsuyama Castle on Mt. Katsuyama seen from the large ferris wheel "Kururin", Matsuyama City. Photo and Caption by Futoshi NANAYAMA